

## 巻頭言

### 第零次世界大戦

澁谷 繁樹

日露戦争は、第零次世界大戦の別名を持つ。戦争の規模と意味、関わった国の数で第一次世界大戦に先立つ最初の世界戦争とみなす観点からの呼称になる。一九〇四年二月に始まり一九〇五年九月に終わった戦争の一つの舞台となった旅順二〇三高地には、二度、足を運んだ。なんの変哲もないただの丘である。かき氷屋があり、麓から頂まで駕籠かき役を務める真つ黒日焼けの筋張った筋肉を持つニイチヤン達が客引きはしているけれども、観光名所の雰囲気はない。二十世紀初頭、新参者の日本を含む列強は、中国を分割統治しよう、ここはウチのもんで、あそこはアンタンチと勝手な思惑を、ヒトンチの庭先で張り巡らしていた。中国にしてみたら迷惑千万、失敬な話というしかないし、乃木とかステッセルとか懐旧談にも名所化にも興味はないのだろう。父親が大日本帝国陸軍の学徒動員組だった日本人は、遠く旅順口を望みながら、複雑な表情の中国人の友人と、ロシア太平洋艦隊は自滅とか二〇三も苦労して手に入れる必要はなかったとか、純軍事的な会話で居心地の悪さを紛らす。なのに、なぜ二度も、というのは、二〇三で風に吹かれていると、日口はもとより中国、米英仏独の歴史が目の前を流れていく気がするから。近代の屍を積み重ねた零次大戦の土地がまとう趣でもいいのか。また来いよ、二〇三の弦音が聞こえてくる。(短ばたセイ談会会長)